

加速する  
出版流通  
システム

# 倉庫とのオンライン化と情報の共有化

▷返品入力の時間を大幅に短縮◁

晶文社

扉の本で知られる晶文社は、今年で創業47年を迎えた書籍出版社だ。中村哲司社長を含めて従業員は23人、人文書を年間25点ほど刊行するほか、学校案内などを刊行してきた子会社・晶文社出版と昨年4月に合併し、それも合わせると年間40点余の書籍を発行している。

## 30年前にコンピューターを導入

同社がコンピューターを利用し始めたのは76年と意外に古い。創業者で一昨年に他界した中村勝哉社長の決断で富士通のオフコンを導入。現在、営業部長兼総務部長を務める

内山良彦取締役が富士通の販売会社のSEと、当時の筑摩書房を手本に手作りでソフトを組んだという。

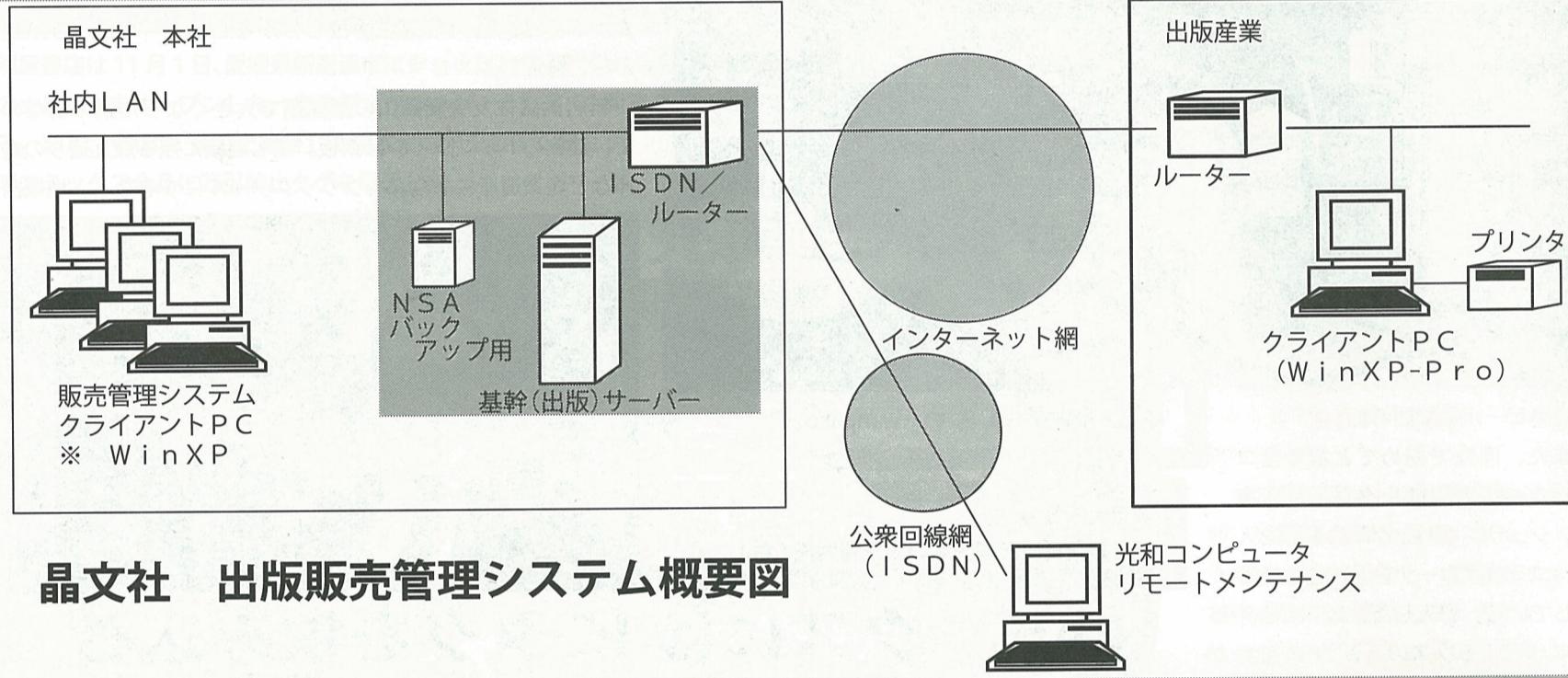
その内山取締役が昨年9月から取り組んだのが、パソコンのクライアントサーバーシステムへの移行だった。「ネットワークもなく、オ

フコンのシステムは硬直した使い方しかできなかった。倉庫とのオンラインとセクション間の情報の共有化をしたかった」(内山取締役)ためだ。

いくつかのシステム会社から見積もりをとったが、以前から知っていた光和コンピューターに決めたのは「当社の規模でもきめ細かく対応し

てくれる。また、出版システムに特化しているので事例を多く蓄積している」(同)という判断からだ。

しかし、出版システムのフルパッケージをいきなり導入したわけではない。まず、自社に必要だと思われる販売管理と印税管理のパッケージを、カスタマイズして作り上げた。



## 晶文社 出版販売管理システム概要図

### 端末10台とサーバーで構成

新システムの本格稼働は決算を終えた今年の2月。自社にサーバーを置いて、端末は販売部、経理総務部、編集部と、物流業務を委託している(株)出版産業の1台を含めて合計10台を導入。ネットワークで結んだ。

内山取締役はその効果として「倉庫とのオンライン化によって、まず

返品の入力が早くなった」ことをあげる。

これまで倉庫とのやり取りは、電話、FAX、そしてトラックの定期便だったため、取次から倉庫会社に返品が着荷してから伝票を定期便で受け取り、経理総務部がオフコンで入力していた。このため、納品については1~2日で締め処理が出来ても、返品は入力に1週間ほどか

かっていた。現在は返品は倉庫への着荷時点で倉庫業者が入力するため、大幅に時間が短縮されている。

現システムについて「コストパフォーマンスは相当向上した」と話す内山良彦取締役



### 美本在庫もリアルタイムで把握

また、同様に返品の改装についても倉庫でそのつどステータスを変更しているため、ほぼリアルタイムに美本の在庫を把握できるようになった。

社内もネットワーク化の効果は大きい。これまで在庫を確認するにも営業部に1台だけだった端末で見るしかなかったが、各部署のパソコンで共有できるようになった。

### 売上印税を自動計算

印税管理もシステム化が必要な業務だった。同社は新刊については発行印税、2刷以降は年1回の売上印

税という方式を探っており、年間に支払が発生する著作者は500人に達する。売上印税を自動計算してレポート、振り込み調書を作成するまでの一連の流れをシステム化する必要があった。

販売システム用の商品マスター、そして印税システムで使う著者マスターのメンテナンスも、刊行1ヵ月前には登録するルールを決め、配本前に一元管理する体制を整えつつある。

エージェントのレポート統一を

する印税管理には頭を悩ませているという。国内エージェントに提出するセールスレポートの様式がバラバラで、システム化できないからだ。このフォーマットが統一されれば、印税管理は全て機械化出来る。

こうして新システムに移行した結果、「月々の負担は今までよりも低くなっている。オフコンからパソコンに切り替えたメリットは十分に感じている」と内山取締役は述べる。オフコン時代に2000年問題で苦労したことなどと比べると、コストパフォーマンスが相当向上したを感じているという。

### 株式会社 晶文社

設立 1960年2月  
資本金 1000万円  
事業内容 書籍出版  
代表者 中村 哲司  
所在地 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-1-12  
URL <http://www.shobunsha.co.jp/>